

Letters of the

# SHELLEY COLLECTION

Number 2 February 1988

The Bunkyo University Koshigaya Library

石川 重俊

シェリー  
と

Tan-yr-allt

1983年7月23日早朝、庭先でさわやかにさえずる名もしらぬ小鳥に目を覚まされた。わたしたちは、このSwanseaのB&Bを9時30分出発、一路Tremadocに向かった。わたしたち四人一行は、イギリス文学ゆかりの地研究旅行をしていたのである。一人はドライバーを引受けてくれ、もう一人は、ヴェテランのナビゲーター役をしてくれた。レンタカーで借りた車は、Boxhall。故障も起こさない、よい車を引当てた。

わたしたちは、A4217に出て、A4067、A474、A4069、A483、B4358、A470、B4518、B4574を経、A4120、A487でPotmadocに入った。Cwm Ellan (Ellan Valley) を越えて、トレマドックの町に入ってきたのである。直進して突当たったところに小さな雑貨を売る店があった。そこで小休止することにした。旅行者用に作られたWales語案内の小冊子が目についたので、それを買ったり、Walesのポピュラー・ソングのカセット・テープを物色したりして、休息の時間を過ごした。店を出がけに、カウンターで店の女主人から、どうしてこんなところに旅行しているのか、などと話しかけられた。これから、この界隈でシェリーゆかりのところを訪ねるところだ、と言うと、シェリーたちが住んでいた家は行って来たかと言う。これ幸いと、そこはどこかと聞くと、この店を出て、左に百メートルほど行くと、左に入るせまい坂道がある、そ

の突当りにあるのがその家だ、ただ、家の入口までしか行けない、絶対に中へは入れてくれないから、ということであった。思わぬ幸運に早速行ってみることにした。車一台通れる坂道を少し上って行くと、その家の入口に突当たった。言われた通り、STRICTLY PRIVATEと小さな立看板が入口に差してあった。この家の内部の写真は、Richard HolmesのShelley the Pursuit に、三葉載せてある。本書は、1974年刊であるから、それ以前に撮られたものであろう。いつ頃の撮影のものか分らないが、家は個人の住宅であり、公開されていない。その写真の一葉は、南側から見た家の(半)全景で、もう一葉は、東側の窓とその下に広がる芝生、三葉目のは居間を通して、東側の窓から南側へ斜めに見える部分の写真である。

この家のあたりは、Tan-yr-allt (bellow the hilside or wood) と呼ばれ、写真でもよく分るように、裏手、北側は高い林の峰になっていて、その上は台地の湿地である。家は中腹の切り開かれたところに建っている。その下方は、南に広く広がるトレマドックの平野を遠くまで眺望できる。

シェリーとハリエットがアイルランドからイギリスに帰ってきて、住むことになったのが、この家である。1812年の9月である。そのころここでは、トレマドックは築堤やニュータウン事業のことで沸返っていた。Treath Mawr 江口からポートマドックの小さな港に至る巨大な築堤強化事業である。トレマドックは当時、ウェールズの「驚異」とまで言われる程、産業振興の町であった。タニロルトがトレマドックと呼ばれるようになったのは、この事業の推進に重要な人物、MP、Foxite Whig、William Alexander Madocks に困んだ名である。マドックス議員は、この丘の中腹に家を建てたが、後に、個人的な経済の事情でこの家を手放してしまう。シェリーたちが住むようになったのが、

この家なのである。シェリーにしてみれば、ここで身の安全が得られれば、最良のことであり、一方、このような大事業にコミットすることは、人とその住む世界を改革する理想の、直接の試みであるから、シェリーの心情を揺るがすに余りあるものであった。シェリーは自ら進んで募金委員長を買って出る。また、重要な会議に陪席させられたり、資金調達をはかる町の集會に主賓演説者として紹介されたりするなど、一躍、町の人々の心を興奮させてしまう。自らの熱意の証として、シェリーは、100ポンドという大金を資金として寄附すると申し出る。しかし、これは実質の伴わないものであった。それどころか、実際には、6.70ポンドもの負債があったため、あやうく拘留されそうになる始末であった。その後、債権者はハリエットの実家、Westbrook 家と接触があり、シェリーは、到底借財を払えるような男ではないと断罪されるような一幕もあったが、本人は、丁年に達すれば、大きな金が家から手に入る筈だ、などと申し立てたりしては、一時、危機を脱したりする。

また、シェリーはロンドンに行き、かねてあこがれのWilliam Godwinに会い、資金調達に尽力を頼み込む。シェリーはロンドンに五週間も滞在して奔走する。(1812年10月4日から11月3日まで)理想や、意気込みの点ではゴドウィンとシェリーの間では、一致する部分はあった。しかし、金銭になると現実とは異なってくる。ロンドンの反応は冷たかった。Hitchener 女史との関係の消滅も手伝って、その挫折感を、詩 “On Leaving London, 1812, Autumn (Esdaile Poems, No. 10で痛切にうたっている)シェリーの熱意は急激に冷め、ロンドンが、トレマドックの理想、自由の望み、真理の気高い勇気を持たないと嘆く。

このような失意の中で、この家で一つの不可解なミステリーのような事件が起きる。シェリーは、一夜、数発の銃弾が打込まれ、大

きなガラス戸が二、三枚砕かれる。ホームズの写真の三つ目ののは、銃弾が打込まれた角度を示したものである。家の東側の芝生は足跡で乱れている。シェリーは泥にまみれ、転げ込むように部屋に入って来る。ナイトガウンには貫通の跡もある。居間の窓の下の羽目板のところには弾がささっている。(後で、シェリーはHookhamに、刺客は自分を目がけて三発撃った、その弾はナイトガウンを貫通して、羽目板を打ちぬいた。だが、犯人は何者なのか、まだつかまっていない、と語っている。Letters I, No. 228.p.359) 朝方には、シェリーは恐怖のあまり消耗しきってしまい、そのショックは極度に達した。胃のあたりが痛めつけられたようでもあった。激しい格闘をしたようにも見えた。(Thornton Huntの記事、“Shelley, by One Who Knew Him” *Atlantic Monthly*, February 1863による。) シェリーたちは、時を移さず、ここを出て他所に居を変える。

この事件は、シェリーの伝記の中でも最も不可解な部分である。親友のPeacockやHoggは、シェリーの幻覚だと言い、シェリーについて理解できない数々の事柄を隠蔽するのに都合のいいこととしたようである。しかしこれは、その後の解釈を歪めてしまうことになった。ホームズによると、Whiteも同じ解釈に立ち、Jefferson, Cameronは、築堤事業や負債から脱け出すためのフィクションだとし、Dowden, Bluden, Fuller等は、事実と空想の所産だとしている。しかし、この事象の背後にあるトレマドックの緊迫した政治的、社会的状況を押えて、この問題に決定的な解釈を立てたのは、H. M. Dowlingであった。(参照：“The Attack at Tanyrall” in *Keats-Shelley Memorial Bulletin*, 1961) この解釈においては、ホッグが伝えているハリエットの、この事件についての手紙(フーカム宛て、3月12日)の存在の重要性が改めて注目されることになる。シェリー自身も、同じよ

うなことを友人たちに書いているようである。特に、あの夜の恐ろしさがシェリー自身の手紙の中にも見られる(13 March, 1833)。だが、ハリエットの説明は、詳細で、真実性がある。

ハリエットの手紙は、彼等がウェールズを離れなければならなくなった事情を述べる。それは、二月二十六日金曜日の夜のことであった。十時と十一時の間に寝室に入った。一時間半ぐらいしたとき、ミスター・シェリーは、パーラーの一つから物音が聞こえてくるのに気がつき、すぐピストルを二丁持って階下に降りていった。使うことになるかも知れないと思い、その晩、装填しておいたのである。ビリーヤド室に入って行くと、後じさりして行く足音が聞こえた。別の小さな部屋に追って行くと、男の姿が見えた。男は、植込みの方に開いているガラス戸から出て行こうとしている。男はシェリーに発砲した。シェリーはそれをかわした。シェリーも発砲したが、火皿の中で発火しただけであった。それから、その男はシェリーを叩きのめした。二人は地面でとっ組みあった。それから、シェリーは二発目を撃った。男の肩に当たったと思った。それは、その男が悲鳴をあげて立ちあがり、捨て台詞を残していったからである。一きつと仕返するぞ、お前の妻を殺す、姉をレーブする、きつとだぞー。十一時頃のことであった。お手伝いの人たちと一緒に、二時間ばかり居間に集まっていたが、シェリーが、あの男はもう来ないだろうから、引上げようということになった。

ダウリングの解釈は、このハリエットの描写の真びょう性を強化するものとなってくる。

わたしたちは、家に通じている小径の縁から、トレマドックの平野に別れを告げ、もと来た坂をバックして降り、坂路を左にして、一路、次の目標地Chesterへと向かった。

(10月6日受理)